

学士・修士5年一貫制に関する第120回大学院部会での主な意見

○ 制度の基本設計・課題認識

- 現行制度においても早期卒業や早期修了の活用が考えられるが、それだと何が課題であって、何を解決したいのか。
- 学生が「5年」に縛られ、修了することのみに過度に集中する可能性があるため、必要に応じて途中から6年間での履修を選択できるような柔軟性を持たせた方がよいのではないか。
- 本制度を導入した際、収容定員を縛っていることによる弊害が出るのではないか。

○ 博士課程との関係・接続

- 5年一貫制博士課程との整合性や、博士後期課程への接続をどう考えるか。
- 博士への接続について、アメリカではA大学の修士→B大学の博士課程（別分野）などに行くと、コースワークの1～2年でまずは修士がもらえる。こういったメリットもあってよいのではないか。

○ 学生の学修・教育上の工夫

- 就活などに多くの時間を取られることなく、5年間学業に集中できる仕組みとすることが必要。
- これまで6年間かけてきた課程が5年になることで、学部段階で身に付けるべき研究以外の能力の涵養が不十分となる可能性がある。研究以外の能力の涵養においても、これまでの学士課程+修士課程と遜色ないものとなるよう、メンターを付けるなどの工夫が必要。

○ アドミッション・評価方法

- 大学院入試は学部で学んだことの定着の意味合いもあり、実施する方がよいのではないか。
- 大学院入試においては成績第一というわけではなく、personal historyを第一に見るなど、多様な方法を可能とすべき。

○ 人材の出口・社会との関係

- 人材の行先はアカデミア、職業人のどちらになるのか。
- 学生にとってはメリットがあるが、企業から見たときにもメリットがあるようにしなければならない（必要な学びを修めた優秀な人材が、通常の学士＋修士課程に比べて早く入社する等）

○ 大学間の多様性・制度運用

- 研究大学や教育系の大学など、様々な大学が5年の構想を練ることが考えられる。それらを自由に認めるというよりは、確認しながら進められるようにすべき。

○ 国際的通用性・単位互換

- 国際通用性を考えたときに、単位の互換性は担保されるようにすべき。
- 単位互換のネットワークが広がる中、日本が独自の制度を作り上げるようなことが無いようにすべき。

(以上)